Annie Laurie

THE SCHOLARS
SING ENGLISH FOLK SONGS

DAM PC

DOCD-0007

Laurie アニー・ローリー

1〜21 ソプラノ：キム・アムプス/カウンター・テナー：ナイジェル・ディクソン
sop.:Kym Amps/coun. ten.:Nigel Dixon
テナー：ロビン・ドヴトン/バス：デイヴィッド・ヴァン・アッシュ
ten.:Robin Doveton/bass:David van Asch

T.No.

1 アニー・ローリー Annie Laurie (スコットランド民謡) ……3'17"

2 ロッホ・ローモンド Loch Lomond (スコットランド民謡) ……3'07"

3 バーバラ・アレン Barbara Allen (スコットランド民謡) ……3'13"

4 故郷の空(ライ麦の畑で) Comin' through the Rye (スコットランド民謡)・1'56"

5 スコットランドの釣鐘草 The Bluebells of Scotland (スコットランド民謡)・1'47"

6 アフトンの流れ Afton Water (スコットランド民謡)……3'20"

7 私はニシンをお塩に漬けた I hae laid a Herrin' in Saut (スコットランド民謡)・1'24"

8 美しいドゥーン川の堤 Ye Banks and Braes (スコットランド民謡) ……2'40"

9 とねりこの木立 The Ashgrove (ウェールズ民謡)……2'26"

10 ロンドンデリーの歌(ロンドンデリーの流れ) The Londonderry Air (アイルランド民謡) 3'02"

11 スカーボロ・フェア(スカーバラの縁日) Scarborough Fair (イングランド民謡)・3'54"

12 リンカーンシャーの密猟者 The Lincolnshire Poacher (イングランド民謡) 1'49"

13 眼差しだけで乾杯を Drink to me only with thine Eyes (イングランド民謡) 2'24"

ザ・スコラーズ, イギリス民謡を歌う

14〜25 ソプラノ：シーラ・モリニュー/カウンター・テナー：ナイジェル・ディクソン/テナー：ロビン・ドヴトン
sop.:Shelagh Molyneux/coun.ten.:Nigel Dixon/ten.:Robin Doveton
バリトン：フィリップ・オレイリー/バス：デイヴィッド・ヴァン・アッシュ
bari.:Philip O'Reilly/bass:David van Asch

14 ボビー・シャフトー Bobby Shaftoe (イングランド民謡) …… 48"

15 グリーンスリーヴズ Green sleeves (イングランド民謡) ……2'44"

16 ある朝早く Early one Morning (イングランド民謡)……3'16"

17 恋人にリンゴを I will give my Love an Apple (イングランド民謡)……1'56"

18 やめて, ジョン O no, John, no! (イングランド民謡) ……2'36"

19 酔っぱらいの水夫 The Drunken Sailor (イングランド民謡)……1'45"

20 わーい, 風だ雨だ Hey ho, the Wind and the Rain (イングランド民謡) 2'40"

21 リッチモンド・ヒルの娘 The Lass of Richmond Hill (イングランド民謡)…2'03"

22 蛍の光 (昔の友) Auld lang Syne (スコットランド民謡) ……3'06"

23 春の日の花と輝く Believe me, if All those Endearing young Charms (アイルランド民謡) 2'26"

24 庭の千草 'Tis The Last Rose of Summer (アイルランド民謡)……3'35"

25 ホーム・スウィート・ホーム (埴生の宿) Home, Sweet Home (イングランド民謡) 3'29"

制作にあたって

DAM会員の皆様，日頃のご愛顧，誠にありがとうございます。

DAMオリジナルCD第7作は，全25曲（70分弱）を収めた「ザ・スコラーズ⊙アニー・ローリー，グリーンスリーヴズ，スカーボロ・フェア」です。曲の頭出しが簡単で，メモリー等各種機能が満載されているCDプレーヤーには，正にうってつけの多曲数，長時間CDといえましょう。

また，タイトル曲の他にも，ロンドンデリーの歌，故郷の空，ロッホ・ローモンド，スコットランドの釣鐘草，蛍の光，庭の千草，ホーム・スウィート・ホーム（埴生の宿），等馴染み深い曲を多数含む，いわば，"イギリス民謡　ザ・スコラーズ・ベスト"ともいうべきCDです。

日本では，イギリスのボーカル・アンサンブルとしてキングス・シンガーズが大変有名ですが，このザ・スコラーズもキングス・シンガーズと同じ，ケンブリッジ大学のキングス・コレッジの聖歌隊の出身で，来日も5回を数えその人気も急上昇しております。

キングス・シンガーズとの大きな違いは，ザ・スコラーズが女声(ソプラノ)を含む，テナー，カウンター・テナー，バス，の4人編成('86年10月現在)であることです。そのレパートリーは，中世やルネッサンス音楽はもとより，現代曲，黒人霊歌と巾広く，とりわけイギリス民謡のアレンジしたものを得意としています。

本年('86)1月の来日にあたり，東芝EMI市販アルバムと共同制作ということで，1月13日と15日の2日間，本郷のバリオ・ホールでレコーディングいたしました。

録音当日は，かなり寒い日でしたが，空調雑音を避けるため，暖房を止めての録音は，スコラーズの皆様に大変お気の毒でした。通常の楽器演奏でも大変なことなのに，生身の肉体が楽器である，ザ・スコラーズが無伴奏(アカペラ)にもかかわらず，絶妙なハーモニーを維持して，全21曲を2日間で収録できたことは，日頃のプロとしての鍛練の厳しさを垣間見る思いがいたしました。

この21曲中，13曲のアナログ録音は，「DAM 45（DOR-0142）」として6月に発表いたしましたが，今回は，アナログ録音と同時に行われたデジタル録音によるものです。更に東芝EMI㈱の御厚意により，'81年発売の「ザ・スコラーズ イギリス民謡集(CC38－3076)」の中から，蛍の光，春の日の花と輝く，庭の千草，ホーム・スウィート・ホーム，の4曲を加えさせていただきました。この'81年録音は，バリトンにフィリップ・オレイリー，ソプラノが初代のシーラ・モリニュー（'86年は3代目のキム・アムプス）という5人編成で，目黒のメディア・スタジオにおいてDAMオリジナル録音と同じディレクター，ミキサーによりデジタル録音されています。

ザ・スコラーズのナチュラルで透明なハーモニーを心ゆくまでお楽しみいただければ幸いです。

なお今回のCD制作にあたり，ザ・スコラーズ，東芝EMI㈱ならびに関係各位に多大な御協力をいただきましたことを，厚くお礼申し上げます。

今後もDAMといたしましては，アナログ，デジタルを問わず，より良い音楽ソフトを開発し会員の皆様に少しでもお役にたてるよう，更に一層の努力をする所存ですので今後とも皆様のご支援のほど，よろしくお願い申し上げます。

DAM推進委員会 DAMPC

〔真庭　健〕

この5月，日本はまるでイギリスの植民地のようなありさまでした。チャールズ皇太子・ダイアナ妃の訪日を迎え，デパートはこぞって「英国フェア」「英国物産展」を開き，関連記事は女性雑誌の特集にとどまらず，朝日新聞でさえ5月8日朝刊には8ページの「英国特集」を別刷でくっつけちゃうフィーバーぶり。この，日本人ならではの，明るく軽いノリって，ヒョーキンでカワユくってスキ。ま，ともかく，おかげでわれわれ日本人，ずいぶんとイギリスのことを勉強しちゃいました。わたくしだって，ダイアナ妃が岩崎良美と同い年であり，なおかつツメを噛むくせがなかなか止められぬといった，㊙の数々を知っております（NON・NO「ダイアナ妃おもしろクイズ!!」による）。けれども前述・朝日の「特集」にしたところで，「伝統と新しさの多重奏――そして生きる誇りのある国」を大見出しに8ページ，一応は読んでみましたが，うわっつらをなぞっただけ，別にどーとゆーことないんですわ。強く印象に残ったことといえば，ダイアナ妃が着た柄をそっくりパクったセーターが「カジュアルなのに気分はリッチ/プリンセス・ダイアナ《ブラックシープ・セーター》」と名づけられ，来日記念に特別に御1名様1着限りで通販され，その価格が27,500円，ワッ，高い！ということでありました。

なぜかイギリス，一応の知識は持っているものの，今一歩踏み込んでの共感がわかない国のひとつじゃないかしら。フランスやイタリア，はたまたドイツ・ロマンチック街道に憧れる女の子はいっぱいいても，ロンドンやスコットランドの奥へ行きたい，なんて人は，ま，あまりいません。簡単にいえば，なんかなじみにくいんですわ。

音楽にもいえます。クラシックを聴く人で，ブリトゥン「青少年の管弦楽入門」，ホルスト「惑星」，エルガー「威風堂々」以外に，イギリス音楽，ひとつでも愛聴する曲があるヒト，これはもう相当なツーといってよいくらい。この3曲はいずれも20世紀に入ってからの作品，従ってわれわれは，大陸でハイドン，モーツァルト，ベートーヴェン，ブラームスを輩出した，あの豊かな時代の，ことイギリス音楽について，殆どなじみがないんですね。実際，19世紀のイギリスは産業革命で突っ走り，20世紀に入るまで，自前の文化を育てるゆとりがなかった，といえるみたい。けれど，じゃイギリスの風土が音楽的に不毛であったか，といえば，それは違う。先に名を挙げた作曲家（ベートーヴェンを除く）をはじめ，ヘンデル，メンデルスゾーン，J. シュトラウス，ドヴォルザーク，チャイコフスキーといったビッグ・ネームが，たびたびイギリスを訪れ，大喝采を博していた。つまりは音楽消費は経済力にモノいわせ，大陸からの輸入に殆ど依存していたというわけで，ここら辺の事情はなにやら今日の日本に似ていなくもありません。18～19世紀にかけてのイギリス音楽に，ぼくらなじみがないとしても，無理ない話。

結局私たち日本人にとって，イギリス音楽は縁遠いものなのかといえば，実は，違います。ビートルズ以来のポップス。これはイギリス産が日本でも大ウケなのはおじさんも知ってる。最近でも，デュラン・デュラン，カルチャー・クラブ，ワム，ジグ・ジグ・スパトニックといった方々が，はるか極東のティーンエイジャーまでもキャーキャーいわせてる。

同様に，いやそれ以上に，100年も前・明治時代から子供達に親しまれたのが，イギリスに生まれた

歌の数々でありました。「埴生の宿」「庭の千草」「故郷の空」「蛍の光」…。原詩を翻案したものもあれば，全く別の叙景詩をつけたものもある，いずれにせよ格調やけに高い日本語の詩が付され，まぎれもなく日本の歌に生まれかわって小学唱歌に収められて，広く親しまれてきたこれらの歌が，実はイギリスのフォークソング，或はポピュラーソングであった，というわけ。近代日本人の感性形成に，寄与するところ大でありました。

フォーク(・ソング)といえば，もう反射的にフォーク・クルセイダーズ，シューベルツ，森山良子なんて名前を想い浮かべる世代，ってある。'60年代半ば，ベトナム反戦の気運の高まりとともに，新宿西口の地下広場は土曜の夜ごとに，ツトメ人までまき込んだ歌の輪ができて，「よあーけわァちかい～」「ウイシャルオーバーカアム」なんぞと，ギターにあわせて歌ったもんです。(あー，恥かし。)ともかく，「フォーク・ソング」といえば土着の古謡，と思いがちだけれど，作者のあるなしに限らず，楽譜によるのでなく歌われることにより，広まり，伝えられていく歌，と考えれば，土曜夜の歌声広場は，まさにフォークしていたといえますね。逆にいえば，歌いつがれることにより，起源や作者なぞどうでもよくなったもの――これがフォーク・ソングなんですね。
このCDできくフォーク・ソングも，恋の歌，子守唄，作業歌と内容は様々ですが，いずれもが人々に親しまれることで，今日に伝わってきたものばかり。長い時の流れの中で，メロディは少しずつ変化してゆき，また歌詞も時代に即した意味を盛り込まれつつ，愛唱されてきました。本来なら一地方に伝わるこれらの歌が，イギリスでは20世紀に入り，(ハンガリーでコダーイやバルトークが果したように)セシル・シャープ，レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズ，パーシー・グレンジャーといった作曲家たちが地方をまわり，採譜し，出版し，或いは管弦楽に編曲することで，より多くの人々に親しまれるものになりました。

フツーの日本人にとってイギリスといえば，シェイクスピア，マザーグース，ビールにスコッチ，ロースト・ビーフに紅茶，といったイメージからなる，ひとまとまりの国家のように思っちゃいます。ところがどっこい，正式名称「大ブリテンの連合王国及び北アイルランド」United Kingdom of Great Britain and Northern Irelandからも解るように，実は，イングランド，スコットランド，ウェールズ，アイルランドと，4つの国からなる連合体なんですわ。となれば文化も，当然音楽も，「イギリス」(Englishの訛ったもの)なぞという，考えてみればイー加減な呼称でひとまとめにできぬ「お国ぶり」があろうというもの。

スコットランド――
大ブリテン島の北1/3を占め，首都は音楽祭で名高いエジンバラ。バグパイプ，スコッチ・ウィスキー，ネス湖の恐竜でおなじみですが，イングランドとは長い戦いの歴史を持っています。その歌はスコッチ・スナップと呼ばれる明るく弾んだ付点リズムが特徴。実在した女性への想いが歌われる〈アニー・ローリー〉，戦さに出た若者への想いを歌う〈スコットランドの釣鐘草〉，なじみ深い〈故郷の空〉，R. バーンズ，A. ヒュームの詩・曲による〈アフトンの流れ〉他，本CD中9曲が同地のもの。

イングランド――
ロンドンが現在，イギリスの政治・経済の中心地であるところから，ついイギリス＝イングランドと思いがちだけれど，実はその文化は，海峡を渡って流入した異民族文化のブレンドによって，形づくられてきました。〈ボビー・シャフトー〉はスコットランドに近い東北部起源のため，バグパイプの効果を模したアレンジ。サイモン＆ガーファンクルにより有名になった〈スカーボロ・フェア〉そして〈グリーンスリーヴズ〉はおなじみです。〈酔っぱらいの水夫〉は船乗りたちに伝わった作業

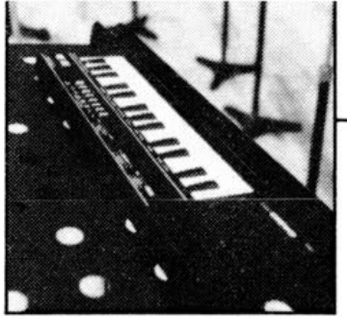
歌。他に〈恋人にリンゴを〉,失恋を嘆く〈ある朝早く〉,シェイクスピアに由来する〈わーい，風だ雨だ〉,L. ナリー詩，J. フック曲〈リッチモンド・ヒルの娘〉もイングランドで歌われてきたもの。

北アイルランド——
1937年，小ブリテン島ともいわれるアイルランドは，共和国として独立。その際，北部の6州が大英連合に留まりました。しかし現在，その6州からなる北アイルランドと英政府との間で内紛が絶えないことは周知の通り。ここに収められた〈ロンドンデリーの歌〉は，もともとアイルランド古来のゲール語で歌われたもの。後になり，英語により様々な詩がつけられ（例えば〈ダニー・ボーイ〉）て広まったが,スコラーズは歌詩をつけずに歌っています。

ウェールズ——
イングランドの西に位置するウェールズ。〈とねりこの木立〉は同地の民謡です。

古くからイギリスでは，「キャッチ」と呼ぶ輪唱や，ハモって歌う「グリー」といった歌が，一般家庭の愉しみとして歌われてきました。その合唱音楽への嗜好は，一方で教会音楽——聖歌隊として高いレベルに磨きぬかれて，今日まで伝わっています。このディスクで絶妙なアンサンブルを聴かせるスコラーズも，ケンブリッジ大学キングス・コレッジの聖歌隊で歌っていた5人が集まって始めたグループ。1969年に結成され，'73年ウィーンのコンサートで一躍名を挙げた彼らは，現在，キングス・シンガーズとならび，ヨーロッパ第1級のヴォーカル・アンサンブルと評価されています。一部に入れ替えがあったものの，ソプラノを除く男性3人は，結成以来のメンバー。'79,'81,'82,'83に続く'86年の来日時に，尚美学園バリオ・ホールで収録されたこのレコード，極めて優秀な録音とあいまって，歌心の愉悦にみちた1枚となっています。

（DAM45の解説より流用）



〔江川三郎〕

生命維持のための聴覚

人間は自然から五感を授かって生きながらえている。このどれ一つが欠けても不自由なことは，不幸にしてそれを失った方がたを見るにつけても，いかばかりのご苦労かと察しがつくものである。聴覚，視覚，味覚，触覚，臭覚のそれぞれを人生の楽しみに活用させているのはもちろんだが，われわれの生命維持にも欠かせないものであることはいうまでもない。いったい五感のいずれが基本的に生命維持に大切なものかよく議論するのであるがどうも決定的な結論には至らないまま終ってしまうのが常である。だいたいのところまとまりかけているのが生を保つために最も大切な感覚としては聴覚ではなかろうかということになっている。笑い話のような話になるが，もし人間が熟睡していて火事が起きたとするとそこで気付くのは五感のうち何が最初に働くかで決まってくるのではないかという考え方だ。煙の臭いでは遅すぎる。熱い！という触覚ではなおさらのこと。目はもともと閉じているとするとたよりになるのは聴覚ではなかろうかというのである。アラーム・ベルはそのために考えられているのではというものである。こんな話がでると，いつも私はいい出す話がある。昔，武芸者が何者かに物陰や背後から襲われた時に殺気を感じてやにわに身をかわしたとか，何んとかして反撃をしたといった講談の話がある。神技めいた物語の世界と考えていたが，最近はそうは思わなくなった。われわれは武芸者ではないが物事を知覚する感覚のうち聴覚を使ってかなりの作業が出来るのではないか。もし，われわれに何者かが音も立てずに迫って来たとする。一人の体の面積が働けば気圧の変化が起る。人間の聴覚は16ヘルツから2万ヘルツまでが知覚されるとしているが，それは純音の話であって動的に様ざま

な音波が重畳されればさらに知覚の範囲は拡がるという研究がなされている。だから気配と抽象的にいわれる人間の動きでも物理的な変化として人間は知覚しているのではと考えている。

聴覚の目的，オーディオ・チェック

そんなに厳しい話ではなくても，われわれの知覚は生まれ落ちた時から母親を求める大切な要素として習練を積んでいる。聴覚の基本目的は母親の声を聞き分けることである。成長するに及んで兄弟や友人達を区分けして楽しい幼児時代を過しているのである。これからすると聴覚の基本は人間の声を聞き分けることと考えてもよかろう。かつて私は満員電車の騒音の中で聞き覚えのある咳ばらいの声を聞いた。とたんに「おやじが居る！」と思った。人をかき分けてゆくとそこには年老いた父親がまさに座っていたのである。このことで私は人間の聴覚の鋭さ，記憶力のたしかさに今さらながら驚いたのである。もちろん私の聴覚のよさを自慢しているのではなく，全般的な話をしているつもりである。いつも主張していることだが，自然ないし神は人間の五感を平均的な能力に作ってくれている。現実に私がとくに興味を持っている聴覚についていえば，知覚の度合は誰しも同じであると考えている。世の中でいう耳のよしあしは良否の問題でなく気が付く時間が早いか遅いかだけのことである。この早く聞きつけるかどうかに対して好奇心が強いとか，習練がつまれているかどうかの差が世の中でいう耳がよいという定義につながってゆくのだと思う。

このオーディオ・チェックという問題について最近になって私は聴覚は人間の声を聞き分ける第一目的をもっと大切にしたいと主張している。オーディオ装置やレコードを聞き分けるということについてはわれわれは当然のように音楽を持って来る。もちろんそれでもよいのだが，音楽はもともと人間の心に訴えかけるように作られている。機械のよし悪しを聞き分けるのみのつもりが時間が経るに従って音楽の情緒的な世界に入っていってしまう。この音楽に対しては，私の好みでいうとこっちの機械の方がよいなどという中途半端な判断になってしまうのが常である。

リアルタイム・リスニング

人間の発した言葉にわれわれは最も敏感であるというこの特性を利用して，私は同時検聴法という音を聞き分ける方法を皆さんにすすめている。はじめはステレオ装置の特性チェックからはじめられた。人間の声をステレオに入力するためにマイクロフォンが必要である。手持ちのどんな製品でもたいてい役に立つ。この出力をそのままアンプのライン入力（チューナー等の補助端子）に入れる。プラグの形式が違うが簡単に短かいケーブル付きピンプラグを輪ゴムでしっかり巻き付けてもよい。アンプのボリュームを上げてゆくとちゃんとスピーカーから声が出て来る。最大にしても人間のしゃべる声ぐらいではあるが，音質の判定に充分な音量である。さて，ここで何の判定をしようか。アンプやスピーカーに悩みを持っている人達は、他のものとそれを交換してみる。ＡＢ比較法という最も厳しい判定法である。誰に聞いてもらってもＡとＢでどちらがしゃべっている人間の声に近いかはほとんど瞬間的に判断できることである。訳け知りの人の中には「人間の声は音域巾が狭い」といわれるだろうが，実はそうでない。体の大きい人が特有の声を持っているのは音域の低い成分を持っているからだ。それが中音域のレベル分布よりも極めて小さいから無視してしまう。こうした部分もマイクが拾い出すととたんに声が似て来るのである。

こうした作業は家族や友人と組になって行うと判定の客観性が出て来る。音源が音楽でないから好みによっての違いが出にくいのも特長である。こうしてしばらく組んだ人達と意見交換をしているうちに，マイク，しゃべっている人間，つまり自分と他人の判定がまったく一致していることに

気付かれるだろう。つまり，この同時検聴法はまったく一人でも出来る作業なのである。人間のしゃべりとそれを聴くことは骨伝導があって自分の声はそのままには聞えぬ，というように教えられている。それはほとんど間違っている。もちろん骨伝導はあるが，口から耳へと空気を伝わって来るレベルの方が圧倒的に大きいから，今聞えている自分の声は他人にもそう聞えていると考えた方がよい。ためしに指で自分の耳を塞いでみて声を出す。ぼそぼそとこもった声が聞える。これが骨伝導成分だ。

こんな具合に人間の声をステレオ装置に通して調べてゆく。そして人間の声がそれらしく聞えるようになったとする。実はこれが大変にお金がかかったり，手間ひまの要ることなのであるが，その結果はステレオ装置の音は実にすっきりした音というか，あっさりした音になって来る。人によっては音楽のイメージが生まれないということもあるし，物足りないとする場合もある。

ここで考えねばならぬのはわれわれが音楽ないし音について何を基準に価値判断をしているのだろうか，ということだ。よもやそんなことはないだろうが，幼い頃から聴いていたステレオ，友人の有名で高価な装置に馴れ親しんで，自分では気付かぬうちに脳裏の中に刷り込まれてしまってはいないだろうか。「いや，俺は絶対にそんなことはない。劇場体験もしている」という人も多いだろう。実体験の中味を分析してみると，映画館であったり，PAシステムから流れている音響が多いということも考えてみなければならない。もちろん，そうした電気音響のなかにもよい音はあるのだが，これを基準にすることは危険が多いことは誰にでも判ることだろう。

実に豊かな低音だと思っていたステレオからこれまた堂どうとした女性のラブロマンスのささやきであろう声が聞かれたらどう感じるだろうか。たいていの場合は音響というものはこういうものだ，それでも自分の好みで私はこれを選ぶというのなら仕方ない。裸の王様であればよいのだ。

ザ・スコラーズ

これまでくどいように人間の声と再生装置，それに検聴法を述べて来た。というのも今回私達が手にしたスコラーズの一枚のレコードの持つ意味を深めるためのものと考えてのことである。

混声合唱が無伴奏で行なわれる。それも誰もが知っている歌ばかりである。親しみ易く，やさしい歌というのは実は音楽的に大変むずかしいものである。この歌唱を聞くと自分も合わせて歌いたくなるというリラックスした雰囲気が生まれればそれは成功ということだろう。スコラーズの判定は皆さんにおまかせしよう。

ところで，純粋に人間の声だけで構成される音楽を聞くにつけて，それらがいかにオーディオ・チェックに適したものかが判って来る。スコラーズの生のステージの体験のない人でも，また言葉の意味が判らなくても，同じ人間としてどのような感情で歌われているものかがたちどころに判定できる。歌う側も聴く側も長い間を専門的に人間業をやっているからである。とりわけ民謡という分野の平易な発声法は，ベルカント唱法のように人体を器楽のような扱い方をしていないだけに自然にそのままを受け止めればよいのである。

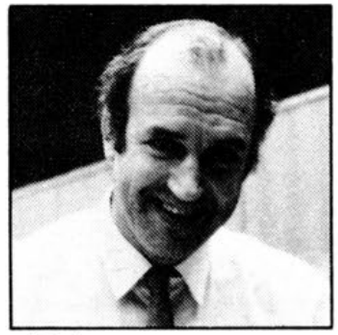
歌のなかに歌う人の表情，顔かたちまでが浮かんでくるような自然な音声がどの歌唱にも折り込まれている。こうした自然さを出すことがこのDAMレコードの企画の意図でもあることなのであろう。

意志の力強さを感じさせる声も聞き分けることも楽しいが，逆に響きを整えることにだけ集中したために声に感情がこめられない部分もあることがレコードの中から聞えて来る。こうした人間の喜怒哀楽の感情が再生音のうえにどれほどこめられて来るか。これこそアナログやデジタルという方式を問わず，レコードに厳しく求められる一番大切な要件であると思うのだ。(DAM45の解説より流用)

ソプラノ：
キム・アムプス

テナー：
ロビン・ドヴトン

カウンター・テナー：
ナイジェル・ディクソン



バス：
デイヴィッド・ヴァン・アッシュ

ロビン・ドヴトン（ザ・スコラーズ）／田中亮三：要訳

●はじめに

英国民謡（以下民謡とする）は近年，ザ・スコラーズの演奏会用レパートリーには欠かせない曲目となっている。それは民謡が時代や文化という障害を乗り越える素直な魅力を有しているからである。民謡はまた学術的な研究の格好の対象でもあり，曲と編曲についての説明ばかりでなく，歌詩についての幾分細かい解説もまた別の角度から新たな興味をひくことになるかもしれない。

●歌詩について

民謡の場合，曲そのものよりも歌詩についての方が良く知られていることがしばしばある。歌詩が有名な詩人によって書き直されている場合は特にそうである。なぜ書き直しが行われたかと言えば，古い歌が蒐集され，印刷される段階になって「あまり下品で卑猥なのでそのままでは人目に触れさせるわけにはいかない」(S.ベアリング＝グールド　1891年）ことが判明したからである。作詩家でもあり民謡の歴史の研究家でもあるジェームズ・リーヴズは，昔の俗謡歌いはジョッキ1杯か2杯をもらって歌ったもので，「浮浪者と見做され，法による処罰の対象となった」と指摘している。

さらに「私の近隣の壁に，いまでも掲げられている告知板には『1811年6月，治安判事は浮浪者たちやバラード歌い等を法に従って処分するため，彼らをすべて逮捕するよう厳重な命令を発した』とある」と述べている。前出のベアリング＝グールドは〝Old Country Life〟(1890年版）という本の中で，このような新しい風紀向上の傾向をやや残念そうに，「こういった古い俗謡歌いの時代は終った。祭り的な機会も性格を変えた。集会を祝う宴会はもうない。それに代わって収穫感謝祭，教室でのひとり6ペンスのお茶とケーキ，教会の聖歌礼拝を行っている」と書いている。

書き直されていくにつれて原作の味は残念ながら薄まっていったが，スコットランドは幸運なことに民謡の擁護者として大詩人ロバート・バーンズ（パロディスト）（1759－96）を有し，事実，替え歌作りとしての彼の作品は群を抜いている。バーンズは貧しい農家に生まれたが，まともな教育を受け，1786年に最初の詩集「スコットランド方言による詩集」を出版した。それ以降，彼の成功は確固たるものになったが，彼はスコットランド民謡の蒐集と書き替えは，郷土に対する責務と考えて一切報酬を受けなかった。そのバーンズの才能を最初に見つけた人の一人はアフトン・ロッジのスチュアート夫人という人であった。バーンズは夫人に感謝の印として**「アフトンの流れ」**を献じている。しかしながらバーンズがこの詩を献じた本当の相手はいとしの「ハイランド・メアリー」(彼が詩の中でそう呼んだ夭逝した恋人メアリー・キャムベル）であったのであろう(今回は詩の一節を割愛した)。**「美しいドゥーン川の堤」**では彼がすでに書いてあった詩をそれに当て，曲に合うように各節の2行目と4行目を2音節ずつ伸ばしている。一例を挙げると

原詩2行目	How can ye blume sae fair?
改作	How can ye bloom sae <u>fresh and</u> fair?
原詩4行目	And I sae fu' o' care?

改作　　An' I sae weary, fu' o' care?

更に，バーンズが編集を手伝ったジェームズ・ジョンソンの"Scots Musical Museum"の中に**「スコットランドの釣鐘草」**が収められている。題になっている青い小さな釣鐘形の花はスコットランドと北アイルランドの原産であるけれども，歌詩には一度も現われない。歌は若い娘の戦場に行っている恋人について問答形式を取っている。

この民謡集に収められているほかのスコットランド民謡中，次の3曲は，それまでにあった古い詩の改作である。**「ライ麦の畑で」**(バーンズ)，**「私はニシンをお塩に漬けた」**(ジェームズ・タイトラー〔1747－1805〕)，**「アニー・ローリー」**(スコット夫人〔1810－1900〕)がそれらである。その中の「アニー・ローリー」は初代マクスウェルトン準男爵ロバート・ローリー卿の娘アンを讃えて，ダグラスという男性が1700年頃に書いた詩であるが，アン嬢はこの詩が物足りないと思ったのか，或は短すぎると思ったのだろうか（3番は全く時代が新しいものなのである)。というのは気の毒なことに彼女は別の人と結婚してしまったのである。

スコット夫人は自分では否定しているが**「ロッホ・ローモンド」**の作者であると信じられてきた。確かにその言葉は**「バーバラ・アレン」**のような古い歌にしては意識的に，詩的にして感傷的である。その「バーバラ・アレン」については，日記で有名なサミュエル・ピプスが1666年1月2日の頃に，キップス夫人が「『バーバリー・アレン』という短いスコットランドの歌を歌うのを聞いた」と記している。心に残るこの歌にはいろいろな版が遺っていて，その中には牧師詩人トマス・パーシー（1729－1811）の「現存する英国古詩」(1765)に収められた16連の詩があり，現在歌われている歌詩はそれから取られたものである。又この詩は今世紀初頭にセシル・シャープによってアメリカのアパラチア地方でも採集されている。

数多くの美しいウェールズ民謡の中で広く知られている歌がごく少ないのは残念なことである。これはウェールズ語（ゲール語）から英語への秀れた翻訳が少ないことによるが，トマス・オリファント版の"Llwyn On"即ち**「とねりこの木立」**はこの美しい歌の精神を伝えようとした幾人かの詩人の試みの最も成功した例である。

イングランドの大詩人の中には地方の伝承詩を書き直したりもじったりすることに興味を持った人は誰もいなかったようで，改作の大部分はみじめなものであった。**「やめて，ジョン」**は偉大なセシル・シャープの手にかかって不本意な変貌をとげたが，彼は全くの善意でこれを学校で歌うのに良い歌にしようとした（実際，学校用唱歌としてポピュラーになった)。幸いなことに，彼の最初の草稿がケンブリッジ大学グレア・コレッジの図書館に保存されていたので，この歌の2人の男女は，教会の結婚式へという結末に導かれるように純粋な求愛とは程遠く，実は女の亭主が航海に出ている間に道ならぬ関係を楽しんでいた，ということがわかる。ここで，ザ・スコラーズはオリジナルに近い歌詩で歌っている。

この民謡集に収められたイングランド民謡のなかで，多分最古のものは**「スカーボロ・フェア」**と**「恋人にリンゴを」**である。前者は「愛するものの責務(つとめ)」(人間には不可能だが，愛する人の心を獲得するためには遂行しなければならない）と一般に呼ばれる種類の歌の系統である。後者は昔の「謎歌」で，中に出て来る果物はある時には芯のないリンゴだったり，ある時にはたねのない葡萄（その当時は有り得ないもの）であったりする。この例はドーセット州シャーボンのJ.バローズの歌をハモンド兄弟が1906年に記録したものである。

「グリーンスリーヴズ」の歌詩もまたたいへん古い。今日では，1584年にリチャード・ジョーンズが出版した「緑のブラウスの貴婦人の新しい宮廷風バラード」に収められた18連の詩から採られたものが歌われている。同じ頃，2人の英国最大の詩人によって書かれた詩がある。一つはウィリ

アム・シェークスピアの**「わーい，風だ雨だ」**で，彼の劇「十二夜」のエピローグ（結び口上）となっている。もう一つの**「眼差しだけで乾杯を」**は彼の友人であり信奉者でもあったベン・ジョンソンの手になるものである。

「リッチモンド・ヒルの娘」の裏話はほぼ2世紀後のものである。「あの頃のことども」の中でジョン・バリントン卿はこう述べている。「この作者はアイルランドの弁護士レナード・ナリーで，彼は1783年にロンドンにやって来て，リッチモンド・ヒルに屋敷を構える富裕な弁護士の娘ミス・ジャンスンと恋に落ちる。彼女を讃えた詩ですっかりぼーとなり，彼女は父親の反対に会って求愛者とかけ落ちし，彼と実りある幸福な結婚生活を送る。われわれはまた父親の心が最後には解けて，2人を祝福したことを知る」。

●曲について

スコットランド民謡に最も共通した特徴は，ヘンリー・パーセル(1659－95)以来，よく使われた五音音階（ペンタトニック）と「スコッチ・スナップ」と呼ばれる快活なリズムと言ってよいだろう。この特徴は2つとも**「ロッホ・ローモンド」**と**「故郷の空**(ライ麦の畑で)」で聞くことができる。後者は，1759年に出版されたブレムナーの「スコットランド人の旋律」中の「粉屋の結婚式」という題のこの歌詩とは必ずしも関連がない。一つの旋律に一つの歌詩だけがあるべきだという考え方は，昔の人々にはひどく陳腐に聞こえたであろう。というのは彼らは曲をその時どきに応じた歌詩という新しい衣裳で飾るのがあたり前だと思っているからである。

われわれはこの中のスコットランド民謡の2人或は多分3人の作曲者のことを知っている。**「アフトンの流れ」**は1811年生まれのアリグザンダー・ヒュームの作曲で，彼は不幸な人生の何年かを負債のため獄中で過ごし，1856年極貧の中にグラズゴーで生涯を閉じた。彼の穏やかな旋律は，もしわれわれがそれを苦悩からの逃避と解釈しない限り，彼の個人的な悩みが見出せない。これとはむしろ逆な環境で良い仕事を残したスコット夫人は，ロマンティックな恋心に溢れた曲**「アニー・ローリー」**を書いたと言われている。話として最もすばらしいのはロバート・バーンズが**「美しいドゥーン川の堤」**の作曲について書いた逸話である。この曲は18世紀のエディンバラの作家ジェームズ・ミラーの作品とされているが，彼はある時，音楽家クラーク氏と同席して，「スコットランド的な曲を作ってみたいものだ」と言った。それに対してクラーク氏は冗談に，「ハープシコードの黒鍵だけを使い，ある一定のリズムを守りなさい。そうすればその希いはかなえられるだろう」と言った。不思議なことに，その通りの方法で草稿を作り，クラークに2，3の手直しをしてもらうと新しい美しい曲が出来上ったのである。黒鍵だけを使った結果としての五音音階がスコットランド的であるということの，これほど確かな証拠が他に求められるであろうか。

他の曲は全て作者不明である。**「バーバラ・アレン」**はリンボールト博士によって初めて出版された「パーシーの遺した音楽標本」(1850年版）に収められている。この曲はスコットランドで採集されたもので，そこでは当時すでによく知られている曲であった。素敵なジグの曲（16～7世紀英国で流行した6／8拍子の急速度で軽快なダンスの曲），**「私はニシンをお塩に漬けた」**は，エアーズの「スコットランドその他の歌曲選集」(1782年）に収められている曲で，この歌をスコットランドの歌に数えてもよいが，歌詩には16世紀の古いイングランド語，スコットランド語の両方が出てくる。

われわれの歌の中で唯一のウェールズ民謡である**「とねりこの木立」**は，この地方の伝統的楽器であるハープの特徴を表わしていると言われている。それに関連して「ペトリー・コレクション」に収められている**「ロンドンデリーの歌」**がアイ

リッシュ・ハープに合うかどうかは明らかでないが，この絶妙なメロディーに満足な歌詩が今までに書かれていないので，ここでは，パーシー・グレンジャーの例にならい4声部の歌詩のない（ハミングの）編曲をした。

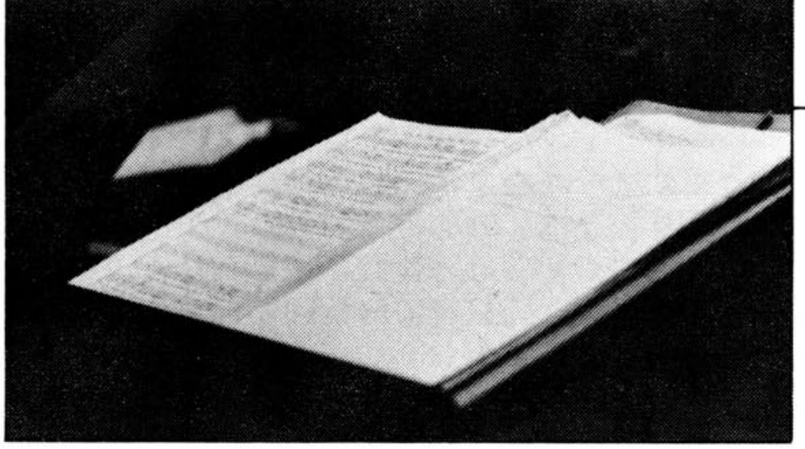
ここでわれわれが名前を挙げなければならないイングランド人の作曲家はジェームズ・フック(1746－1827）で，彼の作曲になる**「リッチモンド・ヒルの娘」**は彼が作ったといわれる2千曲余の中のただ1曲である。**「ある朝早く」**と**「リンカーンシャーの密猟者」**は共に19世紀前半の労働者の間で非常に人気があった曲で，後者は収穫祭の祝宴でジョージ4世（在位1820－30年）の御前で数百人の合唱で歌われたという。**「眼差しだけで乾杯を」**は初め3声部のグリー（18世紀に流行した主として無伴奏で男声だけの3部以上の合唱曲）として現われた。**「ボビー・シャフトー」**はノーサンブリアの小パイプという小型のバグパイプを演奏するイングランド北東部で今でもよく歌われる。そのため，いくつかの編曲に見られるようなバグパイプ風の接続低音効果が聞かれるだろう。全く異った性格を持つように見える次の3つの曲**「スカーボロ・フェア」，「グリーンスリーヴズ」，「酔っぱらいの水夫」**が全部に共通なものを1つ持っている。すなわち短音階の第6音が半音高い「ドーリア旋法」で，イングランド民謡にはよく使われる。これらの歌の多くの版ではその第6音を元に戻して普通の短音階にする傾向にあったが，現代の編曲者の意見ではそれは歌の本性を損なうものであるとされている。この民謡集では「酔っぱらいの水夫」，「リンカーンシャーの密猟者」，「アニー・ローリー」の3曲だけが「転調」という技法を使って編曲されている。この技法は民謡のような素朴な歌の性質とは合わないもので，あまり度重なるとじきに退屈になる。しかしここではあるムードが必要であり，そうすることで曲を不自然な型にはめることはないと思われたので，ハーモニーとテクスチャーを変えることで歌のもともとの意味と雰囲気を高めようと試みた。その結果ちょっと小生意気な歌「故郷の空」の中でハーモニーに1つ2つのめずらしい新機軸が見られるけれど，全体的には，この録音には特に新しく聞こえるものはないと思う。編曲者が勝手を許してもらった唯一のことは，不滅のシェークスピアの言葉を一語だけ変えさせてもらったことである。つまり「われわれの芝居は終った」がより適切な「われわれの歌は終った」になり，「また明日も賑賑しくお越しのほどを」というわけである。

スコットランドとアイルランドの民謡の復活とその後の人気は，それぞれ土地出身の高名な詩人に負うところが大きい。ロバート・バーンズ(1759－96）は多くの古いスコットランドの歌に新しい詩をつけたが，その際，もとの歌の純粋性を失わせないように原詩の要素を巧みに取り入れた。**「蛍の光」**（昔の友）は快活さよりは感傷が勝っている歌であるが，今回のアレンジはバグパイプ的な効果を入れて酒場的雰囲気に仕立てている。

トマス・ムア(1779－1952)の〝Irish Melodies〟は当時も今も人気があり，生涯貧困から抜け出せなかったバーンズとは対照的に多額の収入をもたらした。**「庭の千草」**のメロディーは同じくらい古いイングランドのメロディー**「春の日の花と輝く」**よりはずっと純粋にアイルランド産といえる。後者はしばしば艶笑的な歌詩で歌われていた。

「ホーム・スウィート・ホーム」（埴生の宿）はヘンリー・ビショップ(1786－1855)作曲，ジョン・ハワード・ペイン(1791－1852)台本のオペラ〝The Maid of Milan〟（ミラノの女）の中でヒロインのクラーリが歌うものであるが，この歌だけがたちまちヒットして，今日でもセンチメンタル過ぎると言われながら人気を保っている。

このレコードに収められた歌はいわばザ・スコラーズの愛唱民謡集であるが，今まで知らなかった歌もその素晴らしさに魅了されるし，また聞き馴れた曲もますますその良さがわかってくるであろう。



〔田中亮三〕

●英国民謡とは

英国という国の中には，はやく言えば3つの国があるようなもので，例えばイングランド，スコットランド，ウェールズの各代表チームが戦うラグビーの試合が『インターナショナル・マッチ』と呼ばれているのは示唆的である。英文学とか英国民謡の場合には，この3つに約半世紀前独立して今は英連邦にも属さないアイルランドが加えられる。又，そのおのおのにナショナル・ソングがあるわけだが，古来「芸術に国境なし」といわれる通り歌は自由に相互交流をして，出身と現在の所属が異る歌もある。それでも各地方に特有の音階やリズムがあり，特に歌詩には方言やきまり文句が随所にあらわれる。

この民謡集にも，わが国で明治以来歌いつがれている歌が含まれており，「故郷の空」などはもともと日本の歌だと思っている人が多いであろう。

●いくつかの歌について

曲全体についてはロビン・ドヴトンのかなり詳細な解説があるので，ここでは日本人の目から見た若干の補足を加えたい。

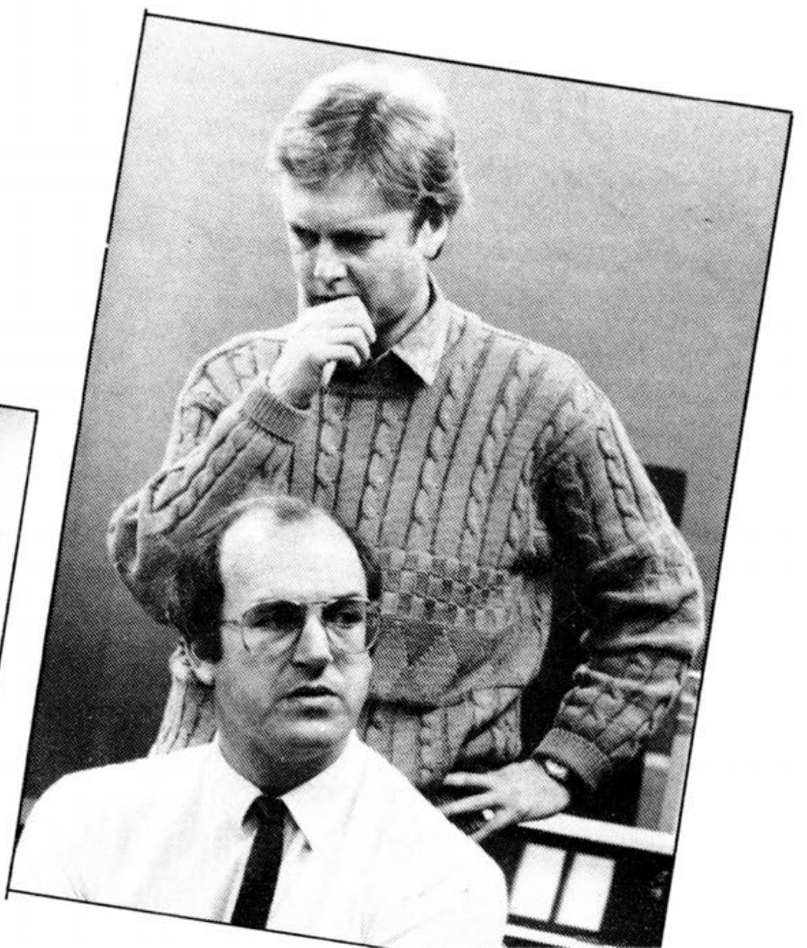
アニー・ローリー

これもわが国でよく知られた曲で，朝露(あした)置く野のしじまに／いとしアニー・ローリー，君と語りぬ，は堀内敬三訳である。

アニー(1682－1764)はサー・ロバート・ローリーの娘で，恋人ウィリアム・ダグラスは父親の政敵であったために恋は実らず，のちに別の男と結婚し，周囲の人々から慕われ82歳で天寿を全うした。アニーの実家マクスウェルトン・ハウスはスコットランド南部ダンフリースシャーにあり，近くのグレン・ケイアン教会に彼女の墓があるという。

ロッホ・ローモンド

曲中では音符に合わせてローモンドと歌われるが，通常はロモンドと発音される。Lochはロッホ



又はロックと発音され，湖や細長く切れ込んだ入江を指す。英国の湖は，スコットランドに近い北東部の湖水地方以外にはほとんどなく，特にスコットランドには数多くあって，そのほとんどすべてにロッホが付いており，日本ではロッホ・ネスが伝説の怪獣ネッシーと共によく知られている。

この曲のみならず，この民謡集に収められたスコットランドの歌に共通して繰り返して出てくる言葉が幾つかある。例えば，yon（yonder)(向うの)，bonnie（良い，きれいな)，banks and braes(堤と土手の斜面)，glen（谷間)，lassie(娘)，laddie（若者）などで，歌詩は一般に単純で，語呂や調子を合わせるために思い切った省略がなされたり，ひき伸ばすために意味のない埋め草が使われたりして，内容的にも大した意味はない。なんと言ってもメロディーがきれいなことと調子が良いことがこの種の歌の重要な要素で，日本人が酒，女，別れ，泪が頻出する歌謡曲を，意味を考えることもなく聞いたり歌ったりするのとなにか通ずるものがあるのだろう。又，気のせいか恋を得た喜びの歌より，あわれな失恋の歌の方が多いようだ。

故郷の空

夕空晴れて秋風吹き／月影落ちて鈴虫鳴く／思えば遠し故郷の空／ああわが父母いかに在す，という歌は，明治初年を舞台にしたテレビ・ドラマ「はね駒」でも主人公の少女が歌っていたが，小学唱歌に収められた大和田建樹の詩は，原作とは全く関係がない。リズムも異っていて，換骨奪胎して自分のものに造り変える日本人の特技が，ここにも表れている（またドリフターズが「全員集合」で歌っていた「誰かさんと誰かさんが麦畑／いちゃいちゃしている，いいじゃないか」はなかなかの名訳であると感心した)。

スコットランドの釣鐘草

題名もメロディーもよく知られているためにかえって歌詩に注意を払わないせいか，題名の可愛らしいがごくありふれた草花の名が，歌詩の内容には全く関係のないことに気がつかない。戦場に行った恋人のことを娘にたずねるという同種の歌は数多くあるが，ハイランドをヒーランドと発音することでお国訛りの風味をつけている。

アフトンの流れ

民謡はお国訛りを使っている場合があるが，ザ・スコラーズは方言の本当の音が一般の人にはきたなく聞こえる恐れのある時は周到に変えて歌っている。

日本で（英国でも）よく知られている「アフトンの流れ」と歌詩（ロバート・バーンズ）は同じだが，曲が全くちがう。一般に知られているのはスピルマンという人の作曲だが，この民謡集では，アリグザンダー・ヒュームの曲で歌っている。だが聴いてみると同じ3拍子でアフトンの生生流転が良く映された美しい曲であることがわかる。前記スピルマンも世に知られ口の端にのぼるのはあの1曲だけのようだが，ヒュームも不遇の一生を送った様子なので，この曲だけはザ・スコラーズを通じて歌いつがれていくことだろう。

美しいドゥーン川の堤，とねりこの木立

2曲とも流れと岸辺を歌っているが，前記アフトンやロッホ・ローモンドなど川，岸辺，湖，谷間を歌ったものがスコットランドに多いのは，イングランドが概して平坦で，水が滔滔と流れる川や峡谷がほとんどないのに，スコットランドは湖，渓流，峡谷に恵まれているせいであろう。

スカーボロ・フェア

1960年代にサイモンとガーファンクルが歌って，わが国でも大流行したので，彼らが映画「卒業」のために作詩作曲したものと思っている人が多いが，歌詩を読むとこれが現代のものではないことが一目でわかる。前記の2人はこれをスカーボロと発音しているが，これはイングランドのヨークシャー北東部の小都市スカーバラのことで，フェアは今日では年に一，二度定期的に巡回して来る移動遊園地のことだが，この場合は中世から行われていた定期市で，近隣からの生鮮食料品のようなものばかりでなく，遠方時には海外からも商人

たちが布，穀類，塩漬けの魚などを運んで物資の流通を行っていた。各節の2行目にくり返し出てくる〝Parsley, sage, rosemary and thyme.〟はハーブ(薬味植物)を売る大道商人の売り声である。

この歌詩は言葉通りナンセンスで，縫い跡のないシャツを作れ，水のない泉から水を汲めとか無理難題で，竹取物語のカグヤ姫が要求する仏の石鉢，燕の子安貝などと似ている。

リンカーンシャーの密猟者

18世紀英国では資本家たちが囲い込み(エンクロージャ)で農地を拡張するために森や林が伐採されたため，それまで狩猟の獲物だった鹿が棲息地を失って減少，狩猟はキジ，ウズラ，兎を銃で撃つ形式に変った。貴族や金持ちはプライベートの猟場(チエース)を持ち，猟場番を置いてキジの養殖をさせ，密猟者の警戒をさせたが，最悪の密猟者は猟場番であったという。

やめて，ジョン

一般に世の中がお行儀良くわけ知り顔の現代と違って18世紀や19世紀初頭は，人びとの性に対する態度はおおらかであったので，当時の歌はおおっぴらに性行動が歌われていた。近年性についてのタブーがだいぶ解禁されたので，ザ・スコラーズも文部省推薦型の歌詩からオリジナルに戻して歌っている。航海で不在の船長の妻を口説き，当初は「ノー」と言っていた女が，ついには床を共にした挙句，朝になっても解放してくれないという艶笑小話的な歌。

わーい，風だ雨だ

シェークスピアの「十二夜」の最後に、登場人物が全員退場して道化だけが残り，「本日の私どもの公演はこれにておしまい。また明日も精一杯皆様お楽しみいただきますから御来場のほどを」と

いう後口上で，当時の芝居の多くは旅廻りで宿屋の中庭で演じ，劇場の場合でも17世紀の半ば以降の額縁舞台と異り幕がないので，こういう具合に終演を告げた。レオンカヴァルロの歌劇「道化師」で主人公の道化を演じる旅芝居の座長カニオが，嫉妬から妻のネッダを舞台の上で刺殺して，「皆さん，芝居は終りました」という台詞も幕引きとしては同じである。ここで，ザ・スコラーズは「芝居」という言葉だけを「歌」に替えて歌っている。

蛍の光（昔の友）

「蛍の光」として余りにも有名で，卒業式，船出，パチンコ屋の閉店といろいろな機会にさまざまな感慨で聴く曲だが，原詩はウォルター・スコットと並んでスコットランド人にもっとも敬愛される詩人ロバート・バーンズの作である。バーンズは農家に生まれ貧しい農民として47年の生涯を終った詩人で，素材にも言葉にも強烈な土着性があり，スコットランドの強い地方訛りを故意に使用しているので，標準英語に馴れた耳や目にはまことにわかりにくい。明治14年に小学唱歌集に入れられて現在でも歌われている1,2番の歌詩が別離を歌っているのに，バーンズの詩は旧友との再会の喜びを歌っている。ところが再会を歌っているこの曲を歌うのはやはり別れの時で，一同が輪になり各人が腕を前で交叉させ，右手で左隣りの左手を取り，左手で右隣りの右手を握って一種の人間の鎖を作る。歌いながら前進して輪を縮めたり，後退して輪を広げたりしながら歌のテンポは徐々に速まり，最後のリフレインはかなりの速さで心行くまで繰返され明るく終る。とかくしめっぽくなりがちの別れの場面を笑顔でつくろおうとするのが，いかなる状況でもシリアスになることを避けようとする英国人の知恵であり，工夫であるのだろう。もう一つこの歌で想い出されるのは大晦日の真夜中，ロンドンのセント・ポール寺院正面の石段である。そこにスコットランド出身者が集って来て並び，午前零時の鐘を合図に一斉にこの歌を合唱する。日本のテレビが一斉に「ゆく年くる年」に切り変わる瞬間に，英国のテレビはセント・ポールの円柱と石段を映し出す。元旦をクリスマス休暇のつづき位にしか思ってないイングランド人とちがって，スコットランド人には古くから新年を祝う習慣があるところに，行く年を惜しみ来る年を喜ぶ日本人と何か共通のメンタリティーがあって，我々が「スコットランド」という音に感じる懐しさの要因になっているのかもしれない。

庭の千草

原詩は，「春の日の花と輝く」と同じトマス・ムアの作品であるが，明治17年に小学唱歌集に収められた“庭の千草も　むしのねも　かれてさびしく　なりにけり……”という歌詩で親しまれてきた。北の国の夏の終りの寂しさを日本語に表現する際に，バラを菊に変えた先人の感覚と知恵に感服する。因みに菊は日本の国華であるが，英国の国華はバラである。この曲はフロトーの歌劇「マルタ」にもアリアとして使われ，古今の名花たちが美しいコロラトゥーラ・ソプラノを聴かせてきた。

ホーム・スウィート・ホーム（埴生の宿）

「埴生の宿」といえばだれでもわかるこの曲を，英国民謡と呼ぶのには少々問題がある。作詩したペインはニューヨーク生まれの俳優，劇作家，詩人で，16歳でパリにデビュー，21歳でロンドンに渡り演劇雑誌の発行をしたり戯曲を書いたりして，60歳でチュニスの領事に任命され翌年死ぬという，この歌の作詩者にふさわしい放浪と波乱の生涯を送ったといわれる。作曲者ビショップは英国人だが，実はこのメロディーはペインがイタリアの農夫の歌うシチリアの歌を聞き覚えていたのを，ビショップが曲にしたということで，盗作とか剽窃とかいう非難が出たと伝えられるが，今風に言えば「多国籍」歌謡である。しかしその出生がどうであれ，またあまりにもセンチメンタルであるといわれようとも，国境を超えて人々の心に訴える力を持っていることにはかわりない。

●ザ・スコラーズについて

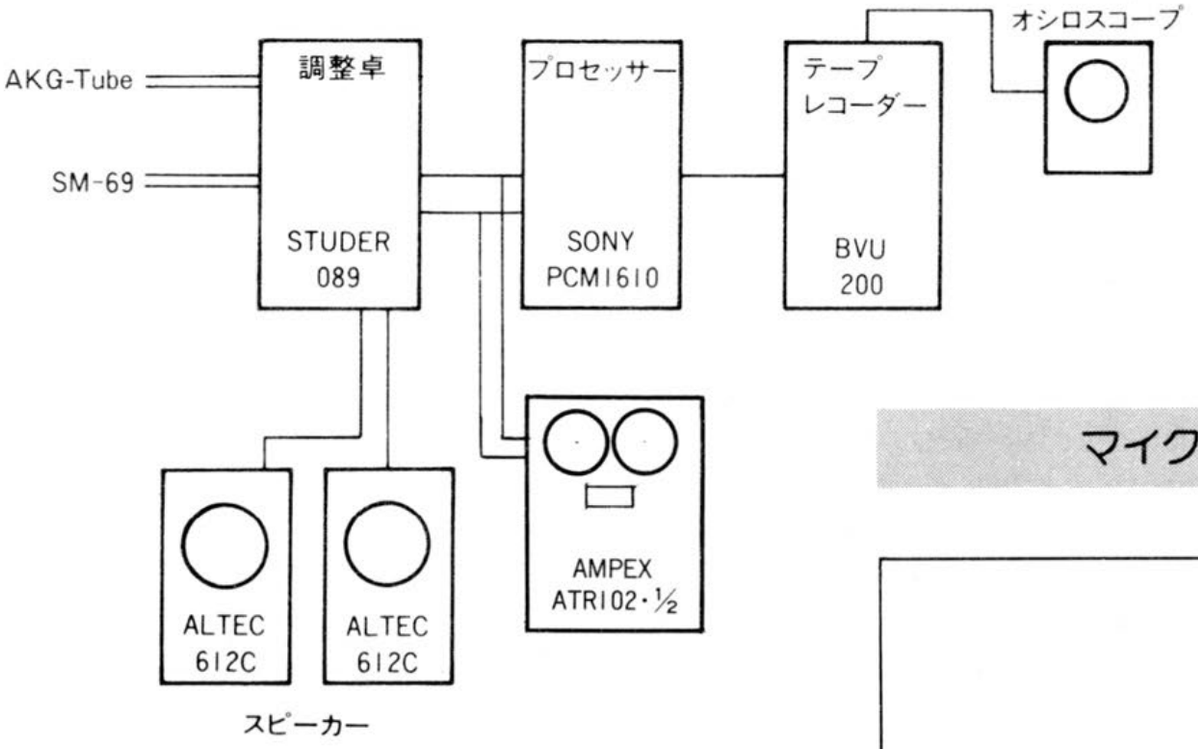
1979年の第1回から1986年1月でザ・スコラーズの来日は5度目となった。この種の地道な演奏活動では爆発的に人気が湧いて満員札止めになるようなことは望めないが，どの演奏会でも音楽が本当に好きな人たちが彼らの妙なる重唱に聴き入っている。

世界的に有名なケンブリッジ大学キングス・コレッジの聖歌隊奨学生(コーラス・スコラー)たちが始めたこのグループも次々にメンバーが入れ替わり，5度の来日でも全く同じメンバーであったことは1度もない。2度目まではバリトンが入っていたし，イギリス民謡集『グリーンスリーヴス』(CC38－3076)のレコーディングの時は，ソプラノがシーラ・モリニュー，2枚目の『美しいフィリス』(マドリガル集)(CC33－3323)ではポーラ・ボット，そして現在はキム・アムプスとなっているが，このグループの土台骨を成すテナー，カウンター・テナー，バスの3人は不動のトリオ，ロビン・ドヴトン，ナイジェル・ディクソン，デイヴィッド・ヴァン・アッシュであり，この3人で音楽面を支えてきたと言ってもよいだろう。この3人の役割分担と連繋は絶妙と言ってもよいものがあり，繊細な神経の持主で音楽学者でもあるロビンは音楽監督的立場にあり，リーダー格のデイヴィッドはグループのスケジュールを管理し，特にすぐれたユーモアのセンスを持つナイジェルは良い雰囲気を保たせる調整役である。現在のソプラノの若いキムは重唱に向く声のようで，これからますます磨きがかかることが期待できるし，他の3人は若い彼女を妹のように温くかばいながら，入念な指導をつづけている。

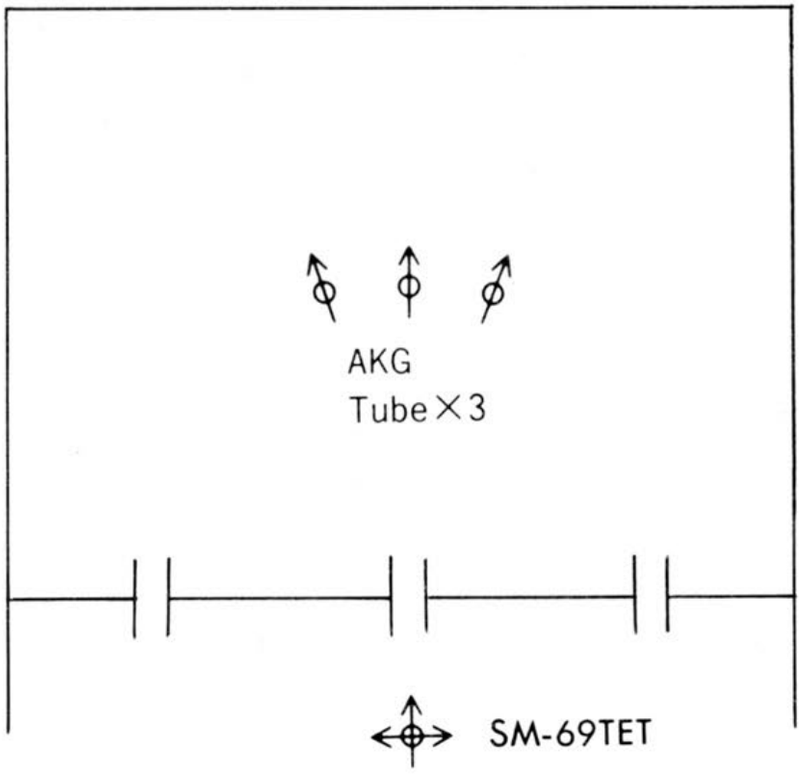
尚このディスクの22から25までの4曲は，グループの可能性を広げるため冒険的な試みとして加わったメゾ・ソプラノのシーラ・モリニューと，2度目の来日の直前まで国営自動車の技術者だったバリトンのフィリップ・オレイリーが参加しているが，今は2人共グループを離れている。

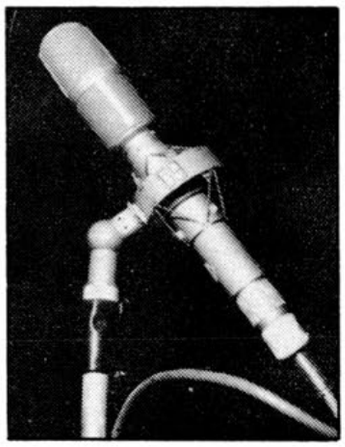
彼らのレパートリーは民謡とマドリガルだけでなく，ヨーロッパ各国，各時代の歌，現代的音楽，ジャズ，ポップスに及んでいるので，さらに多くの来日と多様多彩な活躍を切に祈りたい。

録音ダイヤグラム

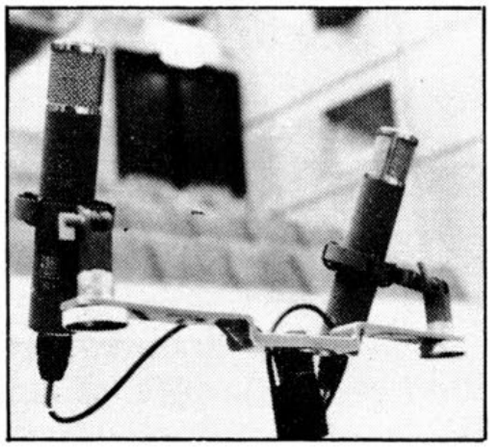


マイク・セッティング





ノイマンSM69



AKG TUBE

24ページから31ページまで、歌詞は省略させていただきました。

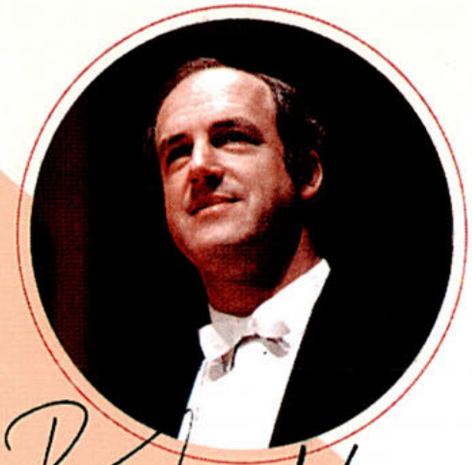
なお，このアルバム・タイトルの "English Folk Songs" は，邦題の「イギリス民謡集」に基づいたものである。厳密に言うと"British Folk Songs"か"English Folk Songs and others"とするべきかもしれないがここでは慣例に従った。

スタッフ

プロデューサー……鈴木武昭
ディレクター……中田基彦
バランス・エンジニア……池田　彰
デザイン……東芝EMI㈱デザイン室
カメラ……堀田正實
録音協力……サウンド・クリエーター
録音場所……アビラック・ミュージック・コミュニティ・センター
《バリオ・ホール》
S. 61. 1. 13 & 15

企画・制作……DAM推進委員会 DAMPC
製　　造……東芝EMI株式会社

DAMオリジナルDOCD-0002（乙女の祈り/宮沢明子）の解説書(4頁以降)はDAM45を流用し，解説中，録音ダイヤグラムもアナログ使用となっていますが，本CD同様SONYデジタルプロセッサー(PCM1610)を使用しております。

アニー・ローリー/ザ・スコラーズ

1 アニー・ローリー……3'17"
2 ロッホ・ローモンド‥3'07"
3 バーバラ・アレン…3'13"
4 故郷の空
(ライ麦の畑で)‥‥1'56"
5 スコットランドの
釣鐘草……1'47"
6 アフトンの流れ‥‥3'20"
7 私はニシンを
お塩に漬けた……1'24"
8 美しい
ドゥーン川の堤‥‥2'40"
9 とねりこの木立‥‥2'26"
10 ロンドンデリーの歌
(ロンドンデリー
の流れ)……3'02"
11 スカーボロ・フェア
(スカーバラの縁日)・3'54"
12 リンカーンシャーの
密猟者……1'49"
13 眼差しだけで乾杯を2'24"
14 ボビー・シャフトー ‥‥0'48"
15 グリーンスリーヴズ ‥2'44"
16 ある朝早く……3'16"
17 恋人にリンゴを……1'56"
18 やめて、ジョン……2'36"
19 酔っぱらいの水夫…1'45"
20 わーい、風だ雨だ‥‥2'40"
21 リッチモンド・ヒル
の娘……2'03"
22 螢の光(昔の友)‥‥3'06"
23 春の日の花と輝く…2'26"
24 庭の千草……3'35"
25 ホーム・スウィート・ホーム
(埴生の宿)……3'29"